

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.29)

「それぞれの土地にその土地の風習(2)」

・・・大晦日の過ごし方・・・

古い年から新しい年、いわゆる大晦日から新年へ変わるとき、どんな感慨に浸るのだろうか。長い悠久の流れの中で、便宜的に定められた年号が単に変わるだけという、割り切った考えも出来ようが、日本人の精神構造は、初日の出、初夢、初詣、初荷などの言葉に象徴されるように、新年は特別な意味で、深く人間の心の中に息づいていると思う。

新年の抱負。普通、それは、夢と希望に満ちあふれたものになるだろうが、皆さんは初詣や初夢に何を託したでしょうか。あるインテリ家庭に招待されたときの、大晦日の過ごし方を物語風に綴って、少々長くなるが、日本とメキシコの年末・年始に関する文化比較を試みようと思う。

一般的には、メキシコでは新年の祝いはあまり重要なものではなく、休日になるのも1日だけであり、どちらかという大晦日の方に相当熱が入ってくる。我々夫婦が招待されたということは、クリスマスの祝いと違って、家族だけで過ごす習慣から言えば、意外なことだが、それだけに普段の付き合いから、家族同様に扱って



れたのだろう。

夜の10時頃から始まった、このフィエスタ(パーティ)は、軽いつまみを時には口にしながら、ある人はテキーラ、又ある人はコーラなどを飲みつつ、ありとあらゆる話題の会話が延々と続く。

この間、主人初め成人した息子達が実にこまめに気をつかい、飲み物や、つまみ類を配って歩く。

この傾向は他の家でも見られたが、噂に聞く、メキシコの伝統的なマチスモ(男性優位主義)などこ吹く風とばかりに、それが実に自然の動作なのだ。

黙って相手の話ばかり聞いていると、時にはこちらに話を振ってくるので、相槌をうったり、日本の習慣を紹介しながら会話に参加せざるを得ない。日頃から当地のことをある程度知っておかないと、会話についていけず、この種のフィエスタの盛り上がり、水を差す結果になるので必死である。こうやって少しずつ試練を受けながら、現地の人との友好親善を高めるといふ、目的の一端を担っていくのである。

夜中の12時五分前頃から、ラジオのアナウンサーのカウントダウンの声を聞きながら、各自に小さな鐘と葡萄が配られる。12時の時報とともに、手にした鐘を鳴らしながら、主人の掛け声にあわせ、この、「ラス・ドセ・ウバス・デ・スエルテ」(12粒の幸福な葡萄)と呼ばれる、12粒の葡萄を食べる。

一粒がひと月を意味し、1粒食べるごとに、その月の願いことをする習慣があり、その言葉を考えている内に次の合図があり、とうとう合図についていけず、最後は4、5粒を一緒に口に放り込んだのであった。これでは年度を通じて願い事がかなえられないはずだ。



日本の除夜の鐘を聞きながら年越しソバを食べる風習と、一脈相通じるところがあるものだ。12を表すのは、「健康、仕事、愛、平和、お金、成功、喜び、調和、繁栄、平静、友情、幸運」なのだろうが、こんな良いことを、多くの人が一斉に願うので、神様もすべての人に対応できず、世の中に不満が蔓延しているのだろうなどと、いらぬことを考えてしまう。

この後、リンゴのスパークリング果実酒(シードラ)を入れたワイングラスを片手に、丸く円陣を組み、「サルー、サルー(乾杯)」の合図とともに、一人ひとりが願い事や希望を述べていく儀式が行なわれた。

我々は最後の方に位置していたので、希望を述べることも残り少なくなってしまう、一瞬窮したが、ワイフは「友情」、同じような意味で、私は「世界に平和を」と述べた。

参加者全員が、お互いに抱擁を繰り返しながら、「新年おめでとう」の挨拶を言い合った後で、一人ひとりが箒で家の入り口から、外へ向かって何かを掃きだす仕草を行なった。



これは一年の邪気を払う意味のようだ。さて、それからは旅行に出発だ。各人がそれぞれリュックサックやスーツケースを持ち、手にした棒状の花火を振りかざしながら、家の周辺の1区画を歩いてくる。普段は持ち歩かない、パスポートまで持ち出してくる念の入れ方である。

これは旅行やバカンスが多く楽しめるようにという願いを込めており、主人は盛んに「ハポン、ハポン(日本)」と叫んで歩いていた。あちらこちらを旅行しているようだが、まだ日本へ行った事が無く、いつか行きたいという希望を持っている風で、この声を聞いただけでも、参加した意義があったと言うものだ。

この頃になると周辺の家々からも、同じように旅行グッズを持った住民が、爆竹やラッパを鳴らし、誰かれとなく、「新年おめでとう」と声を掛け合いながら街頭に繰り出してくる。



昔は実際にピストルを空に向けて撃つ人もいたと、本には書いてあった。打ち鳴らされた爆竹やラッパの音が、夜のしじまの住宅街にこだまし、新年を迎えたことを祝うと同時に、不浄な出来事が多かった一年間の憂さを、持って行き所のないままに、これらの諸行動をとることによって吹き飛ばしているのではなかろうか。

感慨に浸る間もなく、外国人が珍しいのか良く声を掛けられ、臨時日本語教師に変身し、「**Feliz Año Nuevo**」の日本語の意味(新年おめでとう)を教えたりしながら歩く。

旅行のより強い希望がある人は、さらにもう1週町内を歩く行為を追加する。家に戻り、入り際に今度は家の中に小銭の投げ銭を行ない、その上を踏みながら家に入り、各自容器に入れた水を家から外に向かって振りまく。

これらの諸行為を見ると、箒で邪気を払ったり、小銭でお金(福)を呼び込もうとするのは、日本の「鬼は外、鬼は外、福は内、福は内」といいながら、邪気をはらい福を呼び込むために、豆をまく節分の行為を思いおこし、水撒きは清めの打ち水と言えなくもない。

一連の諸行事が終わった後では、本格的な食事、さらにはカラオケなどの余興が続いた。我々は最後まで付き合う体力もないので、早めに切り上げたが、それでも夜中の3時過ぎであった。

メキシコでは新しい年を迎えるにあたって、大晦日には新品の衣類を身につけ、他の人からプレゼントされた赤い下着(愛に恵まれるように)、または黄色い下着(お金をもたらすように)を身につけるといった話を聞いたことがある。愛も金も欲しい人は重ね着をしたりするのだろうか? 私は新品の下着はともかくとして、どんなご



この女性は、愛よりも金を選択した?

利益があろうとも、そんなものは着ようとは思わない。

場所が変わると、同じ様な行事であっても、見た目の内容は変わってしまう。しかしスタイルは変わっても、その中に秘めた意味・内容は、日本とメキシコでは変わっていないのではないかと思われてくる。

これを他に広げてみると、私自身が多くの国を知っているわけではないので、正確ではないかもしれないが、人間の行なうことは国が変われども、根本的には同じ様なものが多いのではなかろうか。それゆえ、お互いを深く知ることによって、共通認識が生まれてくるのではなかろうか。現在世界各地で、紛争が起きているのは、余りにも強者が、相手のことを深く考えずに、自分の価値観だけを相手に押し付けたり、要求しているのではなかろうかなどと考えてしまった。

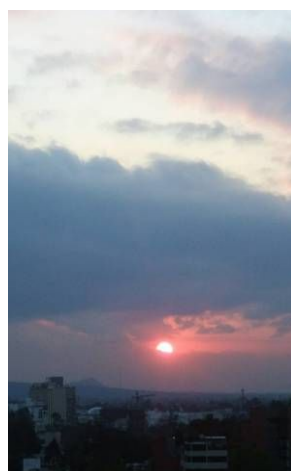
上述のお互いの希望を述べ合う輪の中で、言葉に窮してとっさに出たとは言え、ワIFは「友情」、私が「世界に平和を」と述べたことは、この相互理解の中から生まれてくると思う。

その意味でボランティアを志願し、相手の国の中で生活している中で、交流を深める機会を得たのは、貴重な体験で、さらに機会があれば、出来るだけ交流の機会を活用しようと思っている。あるいはより機会を作るようにより努力をしなければならないというのが、正しいのだろう。

自宅に帰り、もち米を炊いて作った、急造の手作りのモチ(風)で料理したお雑煮を食べ、インフルエンザ騒ぎで帰国した折、購入し大事にとっておいた、大吟醸酒の栓を開け、宝物を扱うようにちびりちびりと飲みながら、ささやかに新年を迎えた。

個人の立場では、日本人としてのアイデンティティを失わないよう、伝統を少しでも維持しようという気持ちと、当地の習慣に少しでも同化しようとする気持ちの、新たな心の葛藤も芽生えた1日でもあった。

(2010年1月4日、新しい年に当たりて、今年もよろしく願いいたします)



イクスタシワトル山の
2010年の初日の出